

過去に1度だけ出させていただいたことがあります。珠算の競技大会でこれほど競技中の経過が観客にわかりやすい大会はない、ということと種目別に順位をつけることでそれぞれの得意種目がある選手には実力を発揮しやすいという点でこれまで見たこともない競技大会だと感動し帰ってきたことを昨日のこのように覚えています。最近では予算の関係等で大会が廃止や縮小の方向に向かっていますが決して必要のない存在ではないと思います。

一般の方には全く知られていない「珠算の競技」とはどのようなものなのかということを知っていただくきっかけ作りの本としてはよいのではないかと思います。

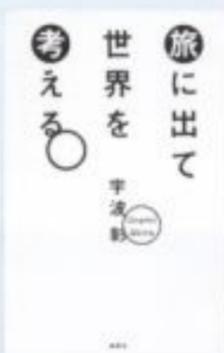
今ほとんどの方が計算する時には電卓を使用されていると思いますが、ただボタンを押すだけで計算の途中経過がわからない(押し間違いがあったとしても気がつかない)ブラックボックスでの計算を本当に信用していいのか疑問に感じたことはないのでは

しょうか?相手の言うがままの数字を信用してもいいのでしょうか?そのことにもっと疑問を持って欲しいと感じていますし、自分で計算する喜びを味わって欲しいと思います。

学習指導要領の改訂で小学校では3桁×3桁の計算も、小数の計算も分数の計算も内容、分量ともに減らされてこれから何年か先に入学してくる学生の大幅な学力低下が予想されます。せめて基本だけでもきちんと身につけさせて送り出せたらと思います。私の小さな願望として本学の学生には是非珠算式暗算をマスターしてもらい、最低でも3桁×3桁の乗暗算がスラスラとできるくらいになって卒業させることができれば、と思っています(その機会がいただければ、の話ですが)。計算能力はあって困るものではないと思いますし(むしろ自信につながるのではないのでしょうか?)数字に対する苦手意識をなくすことはその人の人生にとって役に立つと思います。基本はやはり「読み・書き・そろばん」なのではないでしょうか。(高橋百年美)

o w n w o r k ■ 自 著 紹 介 ■ i n t r o d u c t i o n

旅に出て世界を考える



宇波 彰 著
論創社 2004.4

「内容のない思惟は空虚であり、概念のない直観は盲目である」というカントの有名なことばはいたるところで有効である。材料無しで抽象的に考えても何も生まれず、材料があっても概念がなければ、考えることができない。今回の私の本は、アルバニアやイースター島などあまり訪れる機会の少ない外国や国内各地に旅行した時の経験を材料に、私が今まで学んできた哲学の概念をもとにしてなされた考察の報告である。したがって、この「旅に出て世界を考える」はけっして単なる旅行記のたくいでは

なく、あくまでも思想の書物であると私は考えている。

また本書には、2000年に刊行されると直ちに世界中で論じられ始めた、ネグリ、ハートの「帝国」についての考察、大岡昇平やブルーストについてのエッセーなども収めてある。私の最近の問題意識を本書を通じて知っていただければ幸いである。そして読者が、私が訪れた場所、私が読んだ書物に関心を持つようになり、それによって自分の視野を広める機会ができれば、著者としてそれ以上に嬉しいことはない。

農業問題論 学び教えられ



岩崎 徹 著
北海道協同組合通信社
2003.10

ふつう自著紹介は、控えめに遠慮しながら書くもののようなものである。しかし、この本に限っては、札幌大学関係者に是非読んで欲しい、紹介したいと思っている。私の文章は拙いものだが、自由で闊達な札幌大学学生の知的好奇心と情熱につき動かされて書いたものであり、結果的に札大賛歌になっていると思うからである。

この本は、今まで私が書いてきた巻頭言・コラム・随筆・評論を載せたものである。本は三部構成である。

「第一部・学びあう喜び」は、学生も研究者であるべきことを説いた「大学論」「教育論」「ゼミ論」である。「第二部・食農同根ということ」は、日本と北海道の「食と農」に関する小論である。論文としては少し軽い、随想にしては少し重い、という中途半端なものばかりである。私の農業問題研究は、仲間やゼミ生とともに学び、教えられてきたものであることがわかる。「第三部・学生時代の思い出」は、文字通りの「思い出」を綴ったものである。